

# 私の暮らしの 選択。

私たちの暮らしは、

いろいろなモノに囲まれています。

たくさん買って、消費して、すぐ捨ててしまう。

そんなモノとの付き合い方って、寂しいですね。

なるべくごみを出さない。

もう一度使えるものは再利用する。

モノを大切にする暮らし、始めませんか。

編み物ををして少しずつ余った毛糸を有効利用。太い毛糸、細い毛糸、赤、青、緑…。たくさんの毛糸を組み合わせて楽しい靴下に仕上がりました。

(作・池内喜久美さん)





二度目の人生を生きる着物 昔は踊りをしていたという勢子さん。着なくなってしまった着物は、普段使いの洋服へとリメイク

買って調達するのではなく、つくる、あるものを工夫するが基本姿勢。口にするものだけでなく、身につけるものもそうです。

旧制中学校のときから和裁も洋裁もしていた勢子さん。当時の夢は、「父を3歳で亡くして、母は女手一人で苦労しながら妹と私を育ててくれた。私はみんなが着とるもんが着たくて、洋裁学校の人に製図のとり方だけ教えてもらった。それから本を読んで自己流だね。農業せないかんけん、洋裁で身を立てることはできなかったけど、農閑期にはいつも洋服を作りよった。子どもの服はみな作ったもんよ」

長女の高校の制服も勢子さんが作りました。子どもたちは、勢子さんの愛情いっぱい服に包まれながら成長したのです。

「それこそ、子どもらが『えっ、洋服って買うもんやったん？』っていうたぐらいいよ。好きやったけんね。何も苦じゃなかった。セーターなんかもね、やっぱり買うより、手で編みたくて、手編みをなろうたんよ。機械編みもなろうたけど、限度のある機械よりも、いつまでも使える棒針がええ。いつでもどこでも編めるしね」

タンスには、作った服がずらり。その中には、着なくなってしまうものもあると言います。

「服を見つめては、こよにしたらどうやらかっつて考えて手を入れるんよ」

そうしてお直しされた服は、セーターの袖をとって編んだベスト、着物をくずして作ったスボンやエプロンなど、魅力的な一着へと生まれ変わります。

時間もモノも効率よく使う勢子さん。手作りに精を出す何よりの理由は、健やかに暮らしてほしいと願う家族への愛情なのかもしれません。



毎日の食事づくり 使い込んだ台所用品が並ぶキッチンで、ていねいに、それでいて手際よく調理。古い着物で作ったエプロンはお気に入りの1枚



冷凍保存 家の大きな冷凍庫には野菜がいっぱい



料理) 味付けはごくシンプルに。上から、ほうれん草のごま和え、ほうれん草の油炒め、サツマイモの素揚げ



近くの畑で作る野菜) ネギ、ダイコン、カブ、ジャガイモ、キャベツ、ブロッコリー、ナス...などなど、1年を通していろんな野菜を少しずつ作ります。「畑行くのが楽しみよ」と勢子さんはにっこり

何気なくモノを買ったり、使ったりして過ごす日々。毎日の暮らしを、少しでも見詰め直すきっかけになればと、それぞれの価値観で暮らしを紡ぐ、4人を訪ねました。

無駄を出さない工夫  
◇伊賀上勢子さん

「今日はほうれん草で、ごま和えと油炒めを作ろかね」

徳丸の伊賀上勢子さん(83)。手際よく料理していきます。ほうれん草は自宅から少しのところにある畑で作ったもの。いっぱいできたので、ゆでて冷凍保存しておきました。

「いろんな野菜をちよこちよこ作りよんの。お野菜できるときはいっぱいできるでしょ。無駄にしたくないけん、私は冷凍しとくの。ダイコンもネギもエンドウも。特にお豆さんは、虫がつきやすいけん、すぐくええんよ」とにっこり。

畑で収穫した野菜や知人にもらった野菜は、漬物にしたり、鮮度が落ちる前に冷凍保存したりするのが勢子さん流。解凍は自然解凍です。

「レンジ使わいでも、早く出しといたらええ。それだけのこと」

勢子さんが大事にしているのは、常にどうすればいいか考えること。

◇ 池内喜久美さん  
使い続ける工夫

何種類もの毛糸を使って仕上げたカラフルな靴下。花柄やチェックがかわいい布草履。裾のほつれ修正を繰り返してできたグラデーシヨンのセーター。

余った毛糸、着古した洋服で「お直し」を手掛ける池内喜久美さん(90)。「東古泉」。ダメになったら捨てるのではなく、「どうにか使いたい」といとおしむように手をかけます。

「余った毛糸で作るけん、この靴下、不格好やね」と喜久美さんは、はにかみますが、「かわいらしくてあったかい」と、家族や知人に大人気です。

「とつといた反物を、布草履にしたこともあるんよ。いろんなことを思ってたけど、草履にしてみんなが喜んでくれたけん、幸せよ」と話します。

「モノのない時代に暮らしたけ

◇ 矢野美由紀さん  
モノ選びを考える

中川原にある青い屋根の平屋で、器や手仕事のものを扱っている「かりん」。店内には全国の職人が作った陶器や染織物などが並びます。オーナーの矢野美由紀さんが、工房や窯元を訪れて選んできたものです。

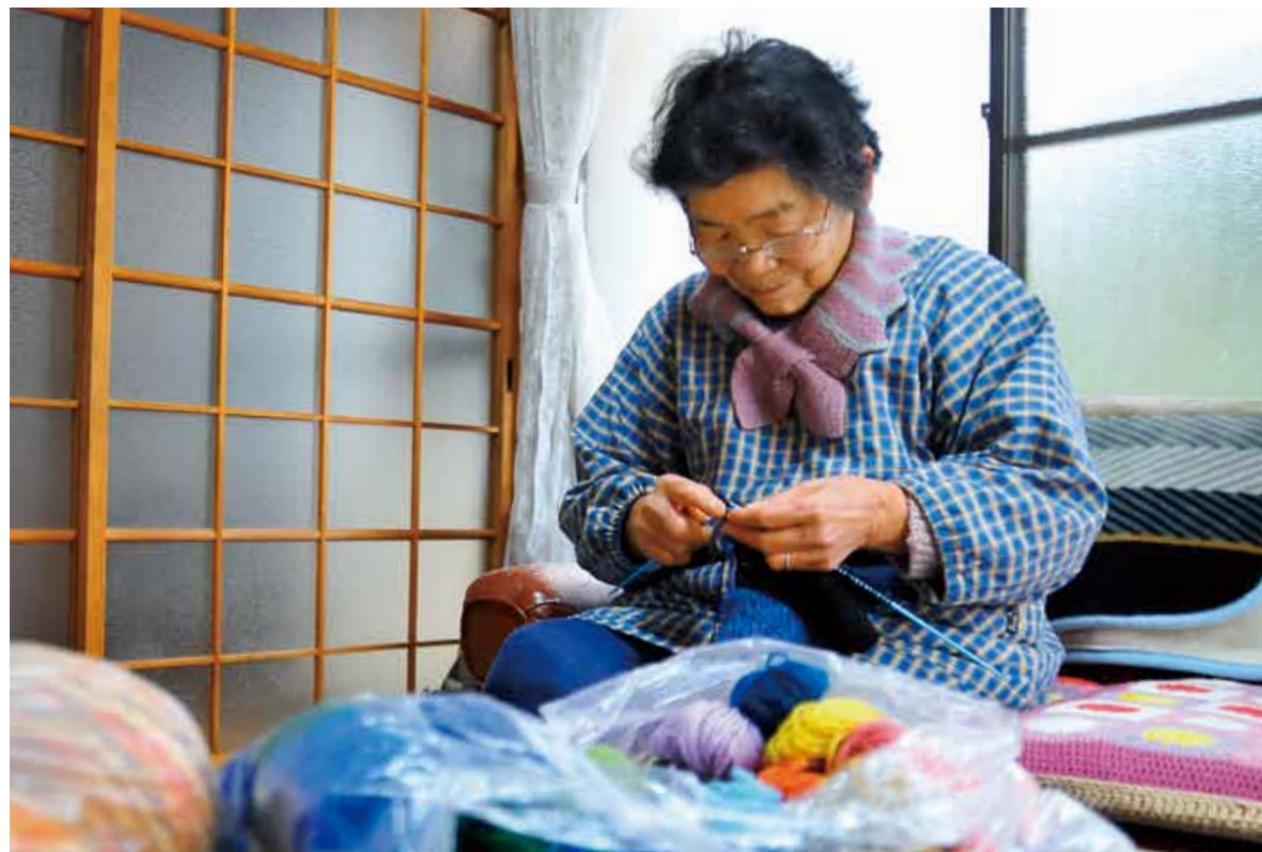
「昔ながらの知恵を生かして、コツコツと人の手で作られたもの、そこにまつわるものづくりの話を聞きたくて。手作りの温かみ、手仕事の良さを伝えていきたいんです。モノはモノでしかないけれど、その背景を知らなくてはダメだと思います」

例えばお店にある「こぎん刺し」は、津軽地方に伝わる伝統的な刺し子のこと。雪国の寒さをしのいだり、毎日の農作業で服がすれて痛むのを縫いだりするために一本一本縫われてきたものです。

「人は、便利なものを求めてしまいうけれど、その半面で、手作りの良さがあります。手仕事の良さを見直



手仕事のモノが並ぶ店) 古民家を改装したどこか懐かしい「かりん」で、美由紀さんは手作りの温かみ、手仕事の良さを、作り手から使い手へと伝えています



編み物) 昔から編み物が好きな喜久美さん。残った毛糸で靴下を編むのが最近の日課です。昔編んだ「襟巻き」「セーター」を身につけ、「座布団」に座って



沖縄やちむん) 壺屋焼の伝統的手法を守りつつ、斬新な形に取り組み、現代の生活に合う器を生み出しています



こぎん刺し) 江戸時代、麻の作業着の防寒と補強を兼ねて刺繍したことが始まり

し、今の暮らしに便利なものと、上手く合わせられたらいいですね」  
モノが飽和状態の中で、自分が何を選ぶかというのは、そのものに一票を投じることだという美由紀さん。じっくりと選んで、できれば長く使ってほしいと言います。

「ずっと使いたいのものって、値段の価値ではなく、使い勝手の良さだったり、選ぶことにストーリーがあるものだったり、『どれだけ気持ちまで選んだか』じゃないですかね」  
矢野さんは手仕事の良さだけでなく、ずっと使い続けるモノ選びのヒントも教えてくださいました。



レジ袋)きれいにたたんで保存。ちよつと使うのに便利。ケースは近所の駄菓子屋さんから譲り受けたもの



布草履) 着なくなってしまった浴衣やシャツで作った布草履。思い出がいっぱい詰まった一足です

ん、もったいなくて、よう捨てれんの。お弁当の箱もタッパーも、洗って使う。残りもんやら保存しとくのちよつとええんよ。若い人が聞いたら、ケチくさいと思うやろうけど、いたんだら直したらええ、汚れたら洗うたらええ。すぐに捨てるんはもったいないけん。どんなもんでも、作ってくれた人は大変やったんやろうなと思うたら、捨てられんよ」

今あるものを長く大切に、かつ、楽しく使い続ける池内さんからは、モノに対する深い愛情が伝わってきます。

「捨てない」がくれる新しい発見  
◆ NPO法人アジアキッズケア

寒さ厳しい1月20日、NPO法人「アジアキッズケア」では、月1回の荷造りボランティア活動が行われていました。北川原にあるプレハブの小さな事務所には、全国から寄せられた支援物資が山積み。学生、社会人、愛媛大学の留学生らが肩を寄せ合うようにして、段ボール箱に不要になった衣類や文具を詰めていきます。大事にしているのは、作業的ではなく、相手の生活をイメージして届けること。



荷造り) 全国から送られてきた物資を仕分けし、段ボールへ

「先月はガーナへ6箱を送りました。今日のはインド行き。暑いところなので、薄手の服を中心に入れよう」と呼び掛けるのは、主催者の喜安勝也さん(北川原)。「子どもの命を守りたい」と、9年前、ご夫婦この団体を立ち上げました。荷物は留学生の家族、日本から帰国した留学生、孤児院を運営している牧師らを通じて、貧困地域の子どもたちに手渡しで届けられます。

これまでに、マラウイ、ケニア、タイ、ネパールなど11カ国に支援物資を送付しています。現地協力者からは、贈呈の報告書が定期的に送られてきます。報告書には、感謝の言葉、喜びの笑顔写真があふれます。

「愛媛を離れた荷物は、アフリカなら船便で約5カ月、段ボール一箱に7000円程かかります。現地の物価なら、送料で随分な品が買えます。モノだけでなく気持ちも届かな



現地のニーズに合わせて) 留学生から母国の状況を聞き、現地のニーズに合わせて荷造りしていきます



愛と真心を添えて) 段ボールに書かれた「手から手へ」のメッセージ。支援物資には愛と真心が詰まっています



笑顔を見せる子どもたち) アジアキッズケアの支援で、貧困地域の子どもたちに笑顔が広がっています



たくさんの人から人へ) 留学生、小中高大学生、社会人…毎回たくさんの方の協力で荷造りが完成



ピアノ) サハラ砂漠のマリの子どもたちにとって、支援物資のピアノは宝物



インド・チェンナイ支援) タンガチャン牧師が運営する孤児院の子どもたちの生活や教育を支援

いと成立しないんです」

荷造りボランティアは、毎回やりたい人が自由に参加する仕組みです。ホームページを見て一人でもふらりと来る人や県内のボランティア情報を見て来る人が多いといえます。それから、学校単位で協力してくれることも。

「日本の体操服は、夏は涼しく、冬は暖かい素材で丈夫なため、外国ではとても喜ばれます。ノートや筆記用具は、学習するために貴重なものです。ピアノは、呼吸を使って演奏する楽器で、電気製品でないのが現地の子どもたちにとって宝物。電気設備すら届いていない所に住んでいるからです」  
そんな話を聞いた児童や生徒からは、さまざまな感想が寄せられます。

「一番心に残ったことは、みんなが送ったものを宝物のように使っ

てくれることです。だから私は物を大切にしようになりました」

「世界には、勉強したくてもできない子がいて、私たちは恵まれているなと思いました。これからは文具を大切に使います」  
荷造りボランティアの一人で、ザンビアで青年海外協力隊として活動していた山本明子さんは、「向こうの子どもたちはいいものを長く使いたいという意識がありません。ポロポロの服をよく洗濯して使います。いらないから送るだけでなく、心と一緒に送るこの活動の輪が広がってほしい」と話します。

喜安さんは「一人じゃできない活動です。全国の人、留学生、みんなの真心のおかげで、笑顔が広がっています。そして何より、支援する側のこちらが、本当の豊かさを教えられているのだと思います」と語りました。

モノを大事にしてきた日本人の心、知恵や技の詰まった手仕事の良さ、物質的に恵まれない国があるという事実…皆さんは、これからどんな暮らしを選択しますか。



ケニア・キスム支援) 支援物資を受け取るケニアの人たち。留学生とその母親の協力で、両親を失った孤児たちを支援しています